

# 韓屋(ハノック)における内庭(アンマダン)に関する研究

## —内庭の使い方の変化および世界の内庭住居との比較—



AK16051 小林真弓

### Keywords

韓屋 内庭住居 住居空間の変化  
ジェンダー 儒教

## 1. 研究背景・目的

### 1.1 研究背景

大韓民国(通称韓国)は日本に最も近い国であるが、日本と似た要素を持つ反面、異なる要素も多く持っている。例えば、似た要素として文法、裸足文化、箸を使うことが挙げられるが、異なる要素として住居空間が挙げられる。また、韓国は古くから儒教文化が根付き、現在の儒教信仰者は少ないにも関わらず、住居空間や文化に影響を及ぼし続けている。韓国には高麗時代から李時代までに建設された韓屋という住居が存在する。韓屋は大庁、オンドル(韓国特有の暖房システム)、内庭を持つ特徴的な住居である。法律の改正により一時期韓屋が減少したが、現在は韓屋の良さが認識され、保全する取り組みが行われている。

アパートなどの現代の家屋の構成においてもリビングを中心に部屋が配置されるなど、韓屋の内庭の造りが影響を及ぼしている。日本でも韓屋の研究は既に多く行われているが、伝統的な韓屋から近代に建設された韓屋の内庭の変化の研究は数少なく、一部の家屋のみである。そこで、時代とともに内庭がどのように変化するのだろうか。また、現代の住居にも内庭が残され、若しくは内庭の概念が残された造りをしているため、韓国人にとって内庭とはどのような存在のだろうか。

### 1.2 研究目的

時代とともに居住形式は変化を遂げ、韓屋においても伝統韓屋から都市韓屋へと時代ごとに変化を遂げている。

本研究では、伝統韓屋の水準が高い状態で残されている韓屋村がある安東と慶州、現在も多くの都市韓屋が残るソウル特別市の鍾路区、新たな韓屋が建設されている恩平区を調査地とする。また、歴史、文化、宗教、気候といった要素を踏まえて、韓屋の内庭がどのように変化していったのかを調査することで、韓屋の内庭がどのような特徴を持つのか明らかにする。

世界の内庭(中庭)住居では、私的な空間から公的な空間へと中庭の使い方の変化している。そのため、韓屋の内庭が私的な空間、または公的な空間であるかなど、内庭の使い方に変化が見られるか考察する。



図1 大韓民国地図



図2 ソウル特別市地図



図3 慶尚北道地図

## 2. 調査方法

研究目的で挙げた地域を対象としてフィールドワークを行う。

調査期間は、地域ごとに以下の日程である。

ソウル特別市：2019年8月21日から2019年8月25日

2019年8月30日から2019年9月20日

安東市：2019年8月26日から2019年8月28日

慶州市：2019年8月28日から2019年8月30日

### 2.1 実測調査

住居を実測し、平面図を作成する。作成した図から、特に内庭に焦点を置いて先行文献と比較を行い、内庭の変化を考察する。

### 2.2 インタビュー調査

調査を行う韓屋の住民の代表者を対象に聞き取り調査を行う。事前に家族構成、間取り図、増改築の有無、内

庭に対する考えなど様々な項目を含めたインタビューシートを作成し、それに基づいて進める。インタビューの結果をもとに、韓屋における内庭の変化、韓国人の内庭に対する考えの変化を考察する。また、先行文献と比較し、内庭の使い方の変化も考察する。

### 3. 調査地概要

#### 3.1 大韓民国

面積100,266km<sup>2</sup>、民族は韓民族である。行政単位が3つ存在し、最も大きな行政単位の1つの特別市と6つの広域市、9つの道である。

日本同様に四季が存在する。冬はシベリア気団の影響を受けて寒さが厳しく、夏は海からの太平洋高気圧によって蒸し暑い。年平均気温は6~16℃であるが、地域によってかなり違いがある。

宗教人口比率は、53.1%（うち仏教：42.9%，プロテスタント：34.5%，カトリック：20.6%，その他：2.0%（出典：外務省 大韓民国基礎データ））で社会・文化に儒教の影響を色濃く受けている。韓国では釈迦誕生日やクリスマスが国民の休日に指定され、韓国人にとって宗教は、日常に根付く身近な存在である。

需要に着目すると、儒教による住宅の変化も起きている。高麗時代末から崇儒排仏政策によって儒教が信仰され、家父長を軸とした大家族（多くの世代が同居）になった。そして、男女別、上下別が厳しくなり、住宅の配置にも影響を及ぼしている。

#### 3.2 伝統韓屋の概要

高麗時代から朝鮮時代（918-1910年）の貴族（両班）住宅を指す。伝統韓屋は、複数の棟と庭が一体となって形成されている。季節ごとに建具の開閉や空間の使い分けにより、住まい手が自ら屋内外の関係を調整することで人と自然が調和する居住文化を育んできた。

身分や性別による空間の秩序が明確な住空間とそれに対応した生活をしてきた。身分の低い使用人は、家全体の出入り口である大門から近い場所にある행랑채（ヘランチェ：行廊房）に住む。男性は家の表に位置する사랑채（サランチェ：舎廊棟）、女性は家の1番奥に位置する안채（アンチェ：内棟）で生活をする。마당（マダン：庭）には、見るための庭と使うための庭が共存する。

#### 3.3 都市韓屋の概要

1930-1960年に都市の中産階級向けに供給された都市型住宅である。1920年代から1930年代にかけてソウルの人口増加に伴い、古い住居地区の敷地が再分割され日本人の住宅と韓国人向けの新しいタイプの住宅が建設された。日本人の場合は日本式住宅（上層は和洋住宅の玄関脇に洋館をつけた和洋折衷型、中下層は長屋式や木造

賃貸アパート、都市韓屋に住む日本人もいる）で、韓国人向けの新しいタイプの住宅が「都市韓屋」である。

不動産市場で売買される建て売り住宅であり、都心の狭い敷地（30坪前後の中小規模）を有効活用して棟と庭が一体となった伝統韓屋の空間構成の特徴を導入している。伝統韓屋の不便な部分を改良し、台所が床仕上がり、藁屋根から瓦葺根にし、近代的建築材料である煉瓦・タイル・ガラス・トタンを使用している。狭小敷地に合わせて隣接住宅とのプライバシーの問題に対応するためにも煉瓦やセメント瓦が採用された。

狭い敷地であるため、平面の形はL字型やコ字型などの曲家が多い。敷地境界線まで建物が建てられ、最も外側の壁が道に直接面していることもある。そのため、마당（マダン：庭）は唯一の外部空間となり、動線を中心となっている。

身分や性別による空間秩序は見られず、伝統韓屋における안채（アンチェ：内棟）と안마당（アンマダン：内庭）による空間構成は残されている。また、都市韓屋でも内房は部屋のヒエラルキーが高く、最も広い面積をもつのが一般的である。

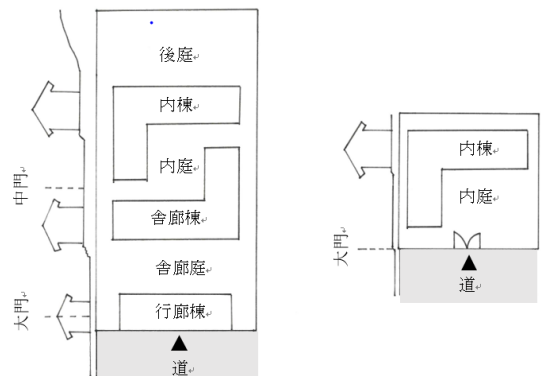


図4 伝統韓屋（左）と都市韓屋（右）のモデル

出典：京都大学 金海梨著「韓屋におけるチェ（建物）とマダン（庭）との関係からみた住み方に関する研究」[2017]を参考に筆者が作成

### 4. 先行研究の検討

金海梨の「韓屋におけるチェ（建物）とマダン（庭）との関係からみた住み方に関する研究」[2017]において、韓屋における建物と庭の時代による変化について言及している。

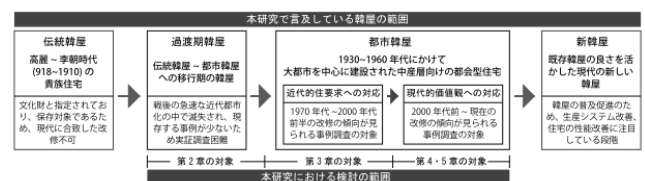


図5 金の研究での韓屋の概念と検討対象韓屋の範囲

#### 4.1 チェ（棟）とマダン（庭）の使われ方

韓国の現代文学「庭の深い家」（朝鮮戦争前後の内容）より、チェの使われ方を見ると、チェとマダンがつながった伝統韓屋の住空間は持続的に見られる一方で、伝統韓屋における身分や性別による秩序は持続されていない。また、内庭に2つの機能が共存している。典型的な韓屋においても2つの機能が共存することは見られず、マダンは使うマダンとして使われることが一般的である。また、富裕層と貧困層の借家世帯が同居する対象住宅では、内庭は階層間(社会階層)の物理的距離が確保される緩衝空間としての役割も果たしている。

#### 4.2 近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋

都市韓屋の間取りの典型とされている中部地方のL字型韓屋を対象にした近代都市化に伴う住要求に対応した韓屋における住み方の調査が行われた。チェの各室をより閉鎖化する増改築が行われている。また、水道の普及、燃料の発達に伴う衛生設備の改善、炊事と暖房設備の改善のために水回り空間が増築されている。屋内空間の断熱性や気密性を重視し建具の変更が行われ、収納空間確保のため半屋外空間である縁側が内部化されている。

マダンは住まい手の住要求に対応し、日常生活を手助けする空間として使われ続けている。マダンの使い方は大きく分けて4つに分類できる。1つ目は、住宅へのアクセス空間及び環境調整空間である。2つ目は、家事及び作業空間である。3つ目は、趣味生活及び休息空間である。4つ目は、駐車空間である。例えば、マダンの中央に固定した花壇を設置してマダンを家庭菜園として利用する、マダンの中央が空地として維持されている場合は車の使用など、家族のライフスタイルの変化に伴い目的に応じた使われ方がみられる。

### 5. 調査結果

調査方法である実測とインタビューはソウル特別市鍾路区のみで実施することができた。その他の地域である安東市と慶州市の韓屋は観光地のルールとして通常は韓屋の中へ入れることができないため、実測などの調査が行えなかった。また、恩平韓屋村も都合上、韓屋の外観把握と博物館調査のみで、実測などの調査を行えなかった。ソウル特別市鍾路区桂洞の韓屋5軒のうち1軒は調査するにあたって筆者が約1ヶ月間宿泊していた韓屋（以下の表の⑧に対応）である。

表1 調査地域の詳細

地域名	詳細位置	調査した韓屋・書院
慶尚北道	安東市	素山村、河回村、屏山書院、臨清閣、陶山書院
	慶州市	良洞村、玉山書院、独楽堂、雁鴨池、仏国寺、石窟庵

ソウル特別市	鍾路区	桂洞の韓屋 5軒 (①-④、⑧) 恵化の韓屋 (⑤)、 通仁洞の韓屋 (⑥) 体府洞の韓屋 (⑦)
	恩平区	恩平韓屋村

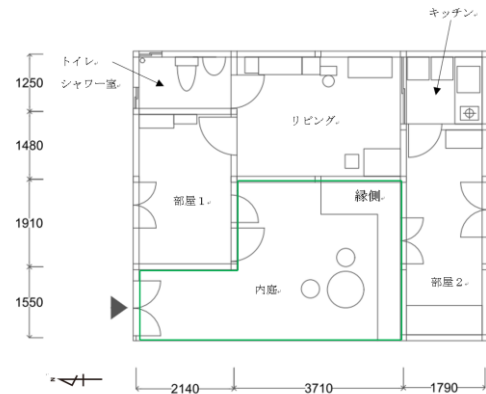


図6 桂洞の韓屋 (②) 平面図

表2 内庭の使い方 (インタビュー調査結果の一部)

内庭の使い方	軒数 (単位: 軒)
くつろぎの空間	7
観賞空間 (植物、空などの景色)	5
物干をする空間	4
会話する空間	4
食事する空間	3
喫煙する空間	3
料理する空間	2
空気循環できる空間	2
パーティーなど催し物の開催する空間	1
調味料の保管する空間	1
洗い場 (野菜や肉など)	1
子供の遊び場 (滑り台、夏にはプール)	1
余裕のある空間	1
写真撮影する空間	1
学生の課題練習をする空間 (主に演劇科の学生)	1
学生の打ち上げ (飲み会) をする空間	1
屋根を架けて屋内化 (リビングやキッチンとして利用)	1
家族と程よい距離感を保てる空間	1
虫がいるため使用しない	1

### 6. 先行文献との比較・分析

#### 6.1 伝統韓屋の内庭の使い方

崇儒排仏政策により、身分や男女、年功序列が韓屋の配置に影響を与えている。伝統韓屋は、各棟に庭が配置されているのが基本である。また、棟や庭ごとに使う人、使い方が存在する。

舎廊庭は舎廊棟に対応し、主な使い手は男性（主）であり、接客や読書などを行う。内庭は内棟に対応し、使い手は女性や家族であり、家事労働を主に儀礼も行う。行廊庭は行廊棟に対応し、使用人の仕事場などで使われる。庫房庭は内庭に続く庭であるため、女性の家事労働の動線であり、味噌などの調味料の保管場所（醬甕台）でもある。後ろ庭は、内庭の後ろに位置し、女性の家事労働や家族の観賞する場となっている。

## 6.2 都市韓屋の内庭の使い方

### 6.2.1 都市韓屋の変遷

日本の植民地統治に伴い、内庭をなくした「集中型」が推奨されたが、当時は受け入れられなかった。そのため、内庭の使い方も変わらず、各部屋へのアクセス通路など、大きな役割を担っていた。また、水道、醬甕台、キムチ漬け、洗濯、物干など台所と関係の深い屋外の多目的な家事空間であった。

日本の敗戦で植民地が解放され、戦後の混乱が落ち着いた頃に新たな住宅が建設された。衛生面と効率面の理由で、「内庭型」から「集中型」へと変わる。台所と大庁（板の間）が一体の大きな部屋にし、ダイニングキッチン化する。そのため、内庭から各部屋に上がるのではなく、玄関を設けた住宅も存在するようになる。

### 6.2.2 都市韓屋の内庭の使い方

先行文献における都市韓屋の内庭の使い方は、住まい手の住要求に対応し、日常生活をサポートする空間として使われている。また、伝統韓屋と同様に内庭は主に家族で使用する私的な空間である。

本研究の調査では、「内庭型」と「集中型」の両方の韓屋が存在した。玄関を設ける韓屋や内庭をなくして屋内する韓屋など、住まい手の住要求に応じて改築又は新築されている。内庭の使い方に着目すると、表2で示されているように、家族の日常生活の一環として使われていることがわかる。ここでも内庭は伝統韓屋と変わらず、私的な空間である。

## 6.3 世界の内庭住居の内庭の使い方

韓国以外の世界の様々な地域にも内庭（中庭）住居が存在する。中国北京にある四合院や中国の下沈式窯洞、南スペインコルドバ歴史地区などがその一例である。これらの中庭住居は、中庭の使い方が私的な空間から公的な空間へと変化している。一方で、6.2.2で述べたように、韓屋の内庭は伝統韓屋と同様に、私的な空間として使われ続けている。何故、世界の中庭住居と韓屋で内庭の使い方の変化に違いが生じるのだろうか。

私的な空間から公的な空間へと変化した要素を以下に考察する。北京の四合院は雑院化、下沈式窯洞は廃墟や房室の誕生、コルドバ歴史地区はパティオ（中庭）祭などがその要素である。

雑院化によって血縁関係の無い家族が共同生活を送る

ことで中庭に増築、または中庭を商業空間として使用することで、私的な空間としての中庭が失われていった。

下沈式窯洞は、若い世代が下沈式窯洞から離れ、下沈式窯洞の住民の多くは高齢者である。地上に建てられる房室が登場することで、下沈式窯洞から房室に移り住む人も多い。使われなくなった下沈式窯洞を守るために下沈式窯洞の一部を展示室として使用して観光客に開放している。そのため、住居内にも私的な空間と公的な空間が混在している。

コルドバ歴史地区は、約90年前から始まったパティオの装飾の美しさを競うパティオ祭により、パティオを公開している。パティオ祭開催時期に公開する、又は開催時期以外にも観光客などに公開している。そのため、中庭が本来の私的な空間から公的な空間へと変化している。

## 7. まとめ・今後の課題

本研究の分析により、韓屋の内庭の使い方の変化がわかった。伝統韓屋では主に女性の家事労働や儀礼などで使われ、私的な空間として使われていた。一方で、都市韓屋でも物干や休憩など私的な空間として使われている。つまり、内庭は私的な空間として使われ続けている。

変化した点も多少ある。伝統韓屋での内庭は「使う庭」であり、植栽などの観賞用の庭ではなかった。都市韓屋での内庭は「使う庭、見る庭」であり、家事労働の「使う庭」と植栽の「見る庭」の両方を兼ねている。つまり、内庭の使い方が「使う庭」から「使う庭、見る庭」へと変化している。

韓屋は伝統韓屋から都市韓屋へと変化しているにも関わらず、「使う庭」、「見る庭」としての変化はあるが、内庭が私的な空間であることに変わりはない。

一方で、世界の内庭（中庭）住居の中庭は私的な空間から公的な空間へと変化している。

以上の考察から、韓屋の内庭が私的な空間として受け継がれている要因を今後の調査で明らかにしていく必要がある。现阶段の見方として挙げられることは、韓屋の用途による違いが関係していると考えられる。

## 参考文献

- 1) 京都大学 金海梨 (2017) 「チェとマダンとの関係から見た住み方に関する研究」
- 2) 京都精華大学 謝璞 (2006) 「歴史的建築（四合院）再生による北京豊盛地区都市住まい空間の再構築」
- 3) 芝浦工業大学 鯉沼大夢 (2018) 「南スペイン コルドバ歴史地区の中庭型住居」
- 4) 建築家・神奈川大学 富井正憲「韓国住宅の内庭」
- 5) 芝浦工業大学 村松千栄美 (2017) 「下沈式窯洞住居における居住空間の変容」
- 6) 金光鉦 (1991) 「韓国の住宅、土地に刻まれた住居」